

《第 492回(2022年6月9日) 子どもの本の読書会記録》参加者:8人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4階集会室

『でかい月だな』 水森 サトリ/著 集英社

本書は、第 19 回小説すばる新人賞受賞作品です。今回の読書会では、2010 年刊行の文庫を読みました。

ある満月の夜、友人の綾瀬に崖から蹴り落された幸彦。一命を取り留めたものの、幸彦は大好きなバスケットができない身体になってしまいます。綾瀬との関係、家族関係、バスケットができなくなった現実、新しい友達……。事件がきっかけで起きた様々な変化に、幸彦は悩み、葛藤します。そんな幸彦の周りで、不可解な現象が起き始め……。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●読みやすく、映像がよく浮かんだ。中川君とかごめが好き。2 人のサイドストーリーが見てみたい。キャベツバスケットのシーンが心に残った。幸彦の心の痛みや、中川君の面白さが分かった。最後は不思議な終わり方。思春期特有の、きれいなものがそう見えなくなっていく感じの変化が、オカルト現象を引き起こしたのか？

●初めて読んだ作家さん。「被害者」と「加害者」の関係が大きなテーマかと思いきや、SF 要素と青春要素が大きかった。主人公の周りの人たちが個性的。タイトルがストーリーをよく象徴している。物語の着地に至るまでの心の書き込みが、もう少し欲しかった。作者の他の作品があれば読んでみたい。

●書き出しが上手。展開が分かりやすく、面白かった。自転車・月・夢・鉄塔といった道具立てが、うまく使われていた。事件当時の綾瀬の心情について、もっと書いてほしかった。綾瀬のような子は生きづらさを感じていたのではないだろうか。未成年が同級生を傷つける事件は、佐世保女子高生殺害事件等と重なった。

●学校の雰囲気や登場人物の言動が大人っぽいので、最初、主人公たちは高校生だと思っていた。落としたところが分からない。家族・友情・いじめ・オカルト・恋など、色々な要素が入っているアラカルトな物語。消化不良なところはあがるが、作者は読者に想像させたくて、あえて曖昧な書き方をしたのだろうか？中川君が好きなキャラクター。

●いろいろな要素が入っていて、よく分からなかった。綾瀬は、幸彦とずっと一緒にいたくて彼を突き落としたのだろう。登場人物たちは、それぞれ何かに執着している。執着は大きいほど苦しくなるが、譲れないものは手放さない方がいい、ということはこの作品は言いたかったのかな。

●自分の好きな本の感想が色々聞けて嬉しい。友達との関係修復に対するエネルギーや純粋さが、10代前半らしいなと思った。オカルト現象は、本当に起こっていたのかもしれないけれど、幸彦のストレスが見せた幻だったのかも。中川君は錬金術師ではなく、魔法使いになりたかったんだろうな。重いテーマだけど楽しく読めた。

●率直な感想は「分からない」。つかみどころがなく、読後はもやもやしていた。あまり感情移入できなかった。もし自分が幸彦と同世代の時にこの作品を読んでいたなら、もっと彼に共感できたんだろうか。180 ページに書かれていた中川君の言葉が好き。キャベツバスケットで、幸彦と中川君が一緒に泣くシーンが印象的だった。

●15 年ぶりに再読したが、よくわからない部分の多いお話だった。響く場面もたくさんあるが、散らかっていてまとまりがない印象。幸彦と綾瀬の関係には、切なさを感じた。2 人が今とは違う関係を作れますように。幸彦を受け入れたり、これから先には悪いことがいっぱいあるから生きよう、と言ったりする中川君が好き。

次回 7月14日(木)10:00~11:30 オーテピア 4階集会室

□『みんなのためいき図鑑』村上 しいこ/作, 中田 いくみ/絵 童心社

申込み・参加費不要。新型コロナウイルス感染拡大の状況により、変更・中止となる場合があります。変更・中止については、オーテピアのウェブ・サイトにてお知らせします。